



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

主の昇天 B年 (2021年5月16日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：使徒言行録 1章1－11節

第二朗読：エフェソの信徒への手紙 4章1－13節

福音朗読：マルコによる福音 16章15－20節

テーマ：^{しゅ しやうてん}主が昇天なされたからこそ

三つの朗読から

第一朗読の最後の言葉は心に響きます。「イエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる」(11節)。もはや、復活したイエスさまを肉眼で見るのは不可能です。しかし、天に昇られたおかげで、いつもわたしたちと一緒にいることになります。イエスさまが再び来られるという天使の言葉に信頼して生きていくのが人類の姿です。ですから、「またおいでになる」時を待ち望みながら、希望の中で人生を歩んでいくのです。

第二朗読では1－6節では「中で」を意味する前置詞「エン」(英語の in) を多用しながら(5回)、キリストの中で、キリストに結ばれて生きることが述べられています。信者はお互いにキリストに結ばれて生きているのですから、「体は一つ、霊は一つ、……一つの希望……主は一人、信仰は一つ、洗礼は一つ、……父である神は唯一」(4－6節)と「一致を保つように」(4節)と招かれているのです。一方、7－13節には「中へ向かって」を表す「エイス」(英語の into) という前置詞が7回も使われています。「キリストの満ちあふれる豊かさになるまで成長する」(13節)という、キリストの中へ、神の中へと向かうという、生きることの目的地が明らかにされています。つまり、キリストに結ばれた(エン)人は、キリストの背丈にまで(エイス)成長するのです。

福音朗読の「すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」(15節)というイエスさまの命令で、「すべての造られたものに」という表現に注目したいです。イエスさまの復活の出来事を伝えるのが宣教ですが、それはすべての被造物へと向けられたものなのです。宣教の目的は、イエスさまが伝え、イエスさまが生きた福音の中へと組み入れられて行くことです。つまり、すべての被造物が神の恵みの

中に生きることを目指すのです。

説教

エルサレムのオリーブ山に主の昇天教会 (Church of the Ascension) があります。キリスト教徒ばかりか、イスラム教徒にとっても聖所となっています。小さな小さな教会です。小聖堂といった感じですよ。朝早い時間に訪れると人影もまばらです。聖堂の中には、イエスさまがここから天に昇られたという場所があって、石の上に足のような跡がついています。これまで二度そこを訪れていますが、いずれも、ご一緒した巡礼のメンバーの皆さんがその足の跡に手を触れて祈っておられました。不信心なわたしは、皆さんのそんな様子をうかがって、バカらしいと思っていました。しかし、聖地巡礼の旅の中で主の昇天教会がここに残る場所の二つのうちの一つになったことに後から気づかされました。

薄暗い聖堂の中にある石に手を置いて祈った後、外に出てみると真っ青な空です。まぶしいばかりの太陽の光です。地上というこの世の善と悪が交差する場所から、イエスさまは青い天の彼方へと、光のみなもとへと昇ってゆかれたのです。足のような跡がある石の上に手を置いて祈るのは、わたしたちもまたイエスさまのように天に向かって行きたいと願うからなのだと思います。

「キリストは復活の後すべての弟子に現れ、
彼らの目の前で天に上げられて、
わたしたちを神のいのちにあずからせてくださいました。」
と今日のミサの叙唱で唱えます。

イエスさまが天に昇られたからこそ、人は自分たちもまた天に向かって行く旅をしているのだと知るのだと思います。人生はこの世での旅路だけで終わるものではないのです。天の御父のもとへと帰って行く旅路なのです。「道、真理、いのち」であるイエスさまは、こうしてわたしたちに道筋をつくってくださったのです。

聖地巡礼の中でもう一つここに残る場所は、聖墳墓教会にあるイエスさまの遺体が下ろされたという石です。ここでも多くの人々がそれに触れて祈っていました。触れることを通じて、イエスさまのころへとつながっていくことができるのです。

いつか、もう一度、主の昇天教会を訪れて、素直にあの石に触れて祈りたいと希望しています。きっと、すいこまれそうな美しい青い空を見上げることができることでしょう。